歌を詠み能を愛して八十余年
強くて明晰でしかもチャーミング
こんな風に生きられたなら

歌人 馬場あき子の日々

樂春かけて老いゆかん

金澤翔子書

語り：國村 隼　音楽：渡辺俊幸　監督：田代裕

題字：金澤翔子　音響効果：中嶋尊史　EED：池田聡　MA：富永憲一
宣伝協力：木村洋子　宣伝デザイン：池田樂水、齊藤賢太郎　WEB製作：kumayan
プロデューサー：森川健一　製作 配給 宣伝：ヒッチハイク
助成：文化庁「ARTS for the future!2」補助対象事業
©ヒッチハイク/FOR田代裕事務所　2023年/日本/113分/ステレオ/16:9

ikuharu-movie.com

映倫 EIRIN 23030-A

95歳になった今も短歌に能にエネルギッシュに走り続ける人

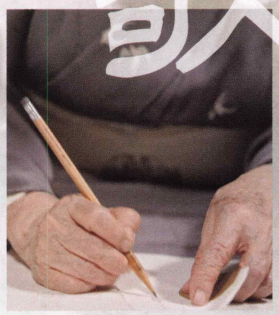
馬場あき子の日々とは…

本作品は93歳から94歳にかけて歌人馬場あき子の1年を見つめたものである。

短歌

さくら花
幾春かけて
老いゆかん
身に水流の音
ひびくなり

1977年、第五歌集「桜花伝承」に収められた一首。
満開の桜を前に、その寿命に思いを馳せ、一転して己の残り時間と重ね合わせる……
映像的な美しさと人生の深淵がせめぎ合うこの歌は、誰もが辿る「老い」に毅然と立ち向かう覚悟を伝えてどこか激しい。
「身に水流の音ひびくなり」という言葉に、己への厳しさが滲んでいる。



慈悲と破壊の混沌

弟子にあたる現・東京大学副学長、坂井修一は、馬場の存在をこのように表現する。年を重ねてもなお持続する力の根源はどこにあるのだろう。

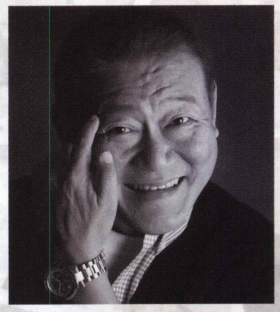
歌と能 不即不離の関係

幼い頃から古典文学を耽読。その教養は短歌に活き、同時に能楽への深い理解に繋がった。
喜多流宗家に入門して80歳を過ぎるまで舞を続け、一方で新作能も発表している。
舞台での解説は明解で分かりやすく、しかも面白い。

能

誰もいない

自宅で夫を見送り、歌の仲間や能の友もみな逝ってしまった。
孤独の中で、いま何を思うのか。



語り　國村 隼

馬場あき子

昭和3年生まれ。
戦争中は軍需工場に学徒動員され、空襲で家を焼け出される。
昭和22年、短歌結社「まひる野」に入会し、本格的に短歌の道へ。
また、時を同じくして能の喜多流宗家にも入門。
教員生活を送りながら、夫の岩田正とともに短歌結社「かりん」を主催。
61年「葡萄唐草」の迢空(ちょうくう)賞受賞をはじめとして、数多くの短歌にまつわる賞を受ける。
平成29年には夫・岩田正が急逝。
平成31年、文化功労者に選ばれる。
『朝日新聞』歌壇選者、NHK市民大学などラジオ・テレビでも活躍。古典や能への造詣を背景に艶麗な歌境を提示。評論に「鬼の研究」などがある。

5月27日(土)より新宿K's cinemaほか順次公開

新宿駅東南口階段下ル　甲州街道沿ドコモショップ左入ル
新宿 K's cinema
03（3352）2471 www.ks-cinema.com
各回入替・全席指定席